

# 介在的状況の表現

## -日本語とスロヴェニア語の対照から-

重盛千香子 (リュブリャーナ大学)  
chikako.bucar@guest.arnes.si

### 0. はじめに

- (1) 母が娘に掃除をさせる。
- (2) じいさんが枯れ木に花を咲かせる。

上の二例のような、いわゆる使役表現では、ふつう、その文型の主な補語に使役の主体(例文の“母”、“じいさん”)と客体(“娘”、“枯れ木”)が表される。意味的には、使役主体が使役客体に何らかの行為をさせるか、または使役客体における状態変化をひき起こすことを表現する。

しかし、いろいろな使役表現の中には、使役客体が文の表層に現れず、動詞句に使役マーカを伴わないもの、つまり、認知的にはもともと使役行為だと考えられることでありながら、単純な他動詞文で表されるものがある。本稿では、このような「単なる他動詞文で表される使役行為表現」(=介在的状況の表現)に注目する。

まず今までの文献から「介在的状況の表現」とは何かを整理して、その統語構造を分類する。次に、ヴォイスの対照研究の見地から、介在的状況表現と再帰行為表現の形態・統語構造の比較を行う。さらに、日本語とスロヴェニア語のコーパスを参考に、両言語において、他動詞文を介在的状況だと理解するときの条件について考える。

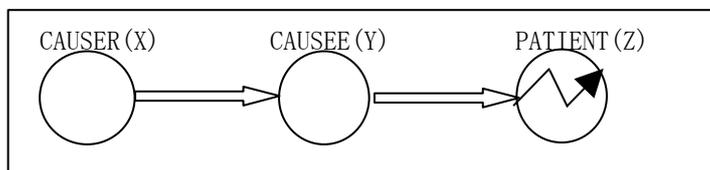
### 1. 介在的状況 - 定義と特徴

本稿で扱う現象を定義すると次のようになる。

介在的状況表現：  
実際の認知的事実としては使役行為であるにもかかわらず、日本語での「XがYに／を(Zを) V-(s)aseru／-(s)asu」のような構文のY(使役の客体)に当たる項が表層に現れず、述語に当たる部分も使役の構造ではなく、単なる他動詞文で表現されるもの。

Langacker (1991) の「行為の連鎖 “Action chain”」の考えによると、使役他動表現は図 1 のように示されるが、この図中の Y (使役客体) が省略される場合が介在的状況の表現だと言える。

図 1 : 迂言的使役他動表現の行為連鎖 (Langacker 1991: 283)



実際の例を見てみよう。

- (3) 花子が髪を切った。
- (4) 太郎が家を立てた。

例えば、例文 (3) の場合、実際には花子 (使役主体) と髪 (切るという行為の客体) の間に、髪を切った美容師などの使役客体・行為主体の存在が考えられる。しかし、文の実現においては、間に立つ (=介在する) 美容師は言及されないのである。例文 (4) の場合には、介在すると考えられるのは、

大工、建設会社などである。つまり、介在者を表す項と、使役行為を表す動詞句の形を復元させるとすれば、次のような言い換えが考えられる。

(3') 花子が美容師に髪を切らせた／切ってもらった。

(4') 太郎が大工に家を建てさせた／建ててもらった。

言い換えた表現(3')(4')では、実際の出来事に即して、介在者(美容師、大工)を二格で表し、動詞句は使役マーカ―(サセ)を伴ったり、モラウと言う授受動詞を伴ったりする。

認知意味論では、例えば Leonard Talmy が、この、文の表層には現れないが実際の行為では介在している使役客体・行為主体を、intermediary agent (介在行為者)と呼び、問題になる表現では、この使役客体・行為主体の意図や意志的行為そしてその効果などが背景化され、概念的に無視されて「透明化」するとして、と次のような例文を挙げて説明している。(Talmy 2000: 274-275)

(5) I'm going to clean my suit at the dry-cleaning store on the corner. (前掲 274)

[=このスーツを角のクリーニング屋できれいにするつもりだ。筆者訳]

単なる他動詞文で表される使役行為表現は、今までの日本語の文献では主に「介在性の表現」または「介在的状况」という呼び方で研究されてきた。佐藤(2005: 94)によると、「介在性の表現」とは、話者が実際には存在する被使役者を無視して、あたかも主語自身がすべての過程を自分で行ったかのようにとらえる表現であるという。そして、その成立要因には、「事態のコントロール」と「動詞の意味的焦点」の2つを挙げている。

(6) 浩が顔写真を撮った。

(7) \*浩が似顔絵を描いた。(佐藤 2005: 94)

例文(6)と(7)で表される2つの行為は、一見似通っているが、(6)の写真を撮るという行為は、(7)の似顔絵を描くという行為と比較すると、その行為の主体の主観などによって結果が左右される可能性が低い。写真の出来は、ほとんどが使用するカメラの性能によるのに対し、絵を描く場合には、行為主体の見方や技術によって結果が大きく変わるからである。介在性の表現が叙述する事態の意味的条件として、使役客体・行為主体がその個人的な考えや主観的判断によって結果を左右する能力が低い、つまり事態をコントロールする能力は使役客体側にはないということが挙げられるわけである。

(佐藤2005: 94-95) また、2番目の条件として、他動詞文において何らかの結果性が含意されてはいても、動詞の意味的焦点が動作の過程のあり方にある場合は介在性の文を成立させにくいとしている。(佐藤2005: 96-97)

(8) 花子がセーターをつくった。

(9) \*花子がセーターを編んだ。(佐藤 2005: 97)

例文(8)と(9)も、似通った文ではありながら、(8)を介在性の表現(例えば、だれかに頼んでセーターを仕立てた)と理解できるのに対して、(9)は、「編む」という動詞が動作過程のあり方をより詳しく特定するものであるため、介在性の表現として成立しにくくなる、というわけである。

また、鄭(2006: 117-118)は、この現象を「介在的状况(intermediate situations)」とし、その表現として使われる「介在構文」を、「言語化されない現実には存在する脱焦点化された被使役者(defocused causee)があり、その不可視的な存在を介して、客観的には間接的に被使役事態を引き起こす状況であることを表す構文」と定義している。

山本(2008)は、これらの研究をさらにまとめる形で、「介在性表現」とは「行為者(被使役者)とその行為が脱焦点化され、主語が表す使役者と事態が焦点化されるという相関的な構造である」としている。山本によると、介在性表現の成立条件は次の2つになる。A. 該当する叙述対象が社会的に慣習化している程度が高い場合、B. 「被使役者」と「行為」が脱焦点化され、叙述対象全体を「事態」として捉えることができる場合。この2つは連動していると捉えることができると思う。例

えば、髪が長かっただれかが、ある日短い髪型で現れたとき、ふつう町に出れば美容院や床屋があって、そこで髪型を変えるのが通常の行為であるような社会に住んでいる限り、美容師や、その美容師が持っている鋏などを使ったという実際に起こった行為が脱焦点化され、以前髪が長かったが、今は髪が短くなった使役主体者とその現在の髪型だけに焦点が絞られるのである。

また、鈴木（2007：217-218）は、「非行為者主語の他動詞文」にいくつかの種類があるとしている。

(10) 太郎は美容院で髪を切った。

(11) マフィアのボスが警備員を殺した。（佐藤 1994:61）

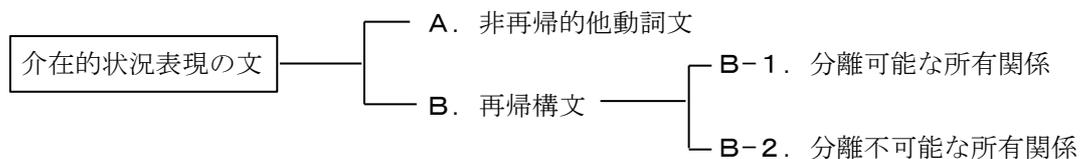
鈴木によれば、例文(11)は「マフィアのボスが部下に命令して、警備員を殺させた」と解釈でき、その場合はこれを「使役的他動詞文」と呼び、再帰性によって成立する(10)や本稿にすでに挙げられた例文(3)(4)(6)(8)と区別している。ここでいう他動詞文の再帰性とは、構文のガ格名詞とヲ格名詞が所有関係にあることで、次の2点によって確認できる。（鈴木2007:218）

- i. 直接受身文にできるか（できる場合は再帰性がない）
  - (12) \*髪は太郎によって切られた。（鈴木2004:39）
  - (13) 警備員はマフィアのボスに殺された。（鈴木2004:40）
- ii. 他動詞文のガ格名詞（N1）とヲ格名詞（N2）が、「N1のN2」で表せるか  
 太郎の髪、\*マフィアのボスの警備員

再帰性の有無による他動詞文の分類は、日本語を他の言語と比べて研究する場合、特にスロヴェニア語のように再帰辞や人称代名詞が関わったさまざまな文型が発達している言語との対照では有効なものである。また、ここで注目する再帰性に関しては、ヲ格で表される名詞がガ格名詞にくる人物の身体部位（例：太郎の髪）であるか、所有物（例：太郎の家）であるかによっての下位分類が考えられる。これには、澤田（2007:432）が「分離不可能所有」、「分離可能所有」という用語を使っているので、本稿でもそれに倣う。

## 2. 介在的状況表現の統語的分類

前節で概観した今までの研究を参考に、さらに再帰構文の特徴を考慮して、本稿が注目する介在的状況表現の文を次のように大きく二つに、さらにそのうちのひとつである再帰構文を二つの下位類に分けて考えることができる。



それぞれの分類を代表する例文は次のようなものである。

### A. 非再帰的他動詞文

(5) ヒトラーが何百人ものユダヤ人を殺した。（鄭 2006：117-118）

(6) 聖徳太子が法隆寺を建てた。（鈴木 2007:218）

### B-1. 再帰構文・分離可能な所有関係

(2) 太郎が家を建てた。

### B-2. 再帰構文・分離不可能な所有関係

(1) 花子が髪を切った。

### 3. 介在的状況表現と再帰行為表現

下に示す表1は筆者が以前、日本語とスロヴェニア語の再帰行為表現の対照（重盛 1992）を行ったときに作ったもので、左側には日本語、右側にはスロヴェニア語において再帰行為表現に使用される構文の形態・統語的構造の種類を、左右同意義の例とともに示している。ここでの「再帰行為」は、仁田（1982）の規定する「再帰性」（＝動作主から出た働きかけが、結局は動作手自身に戻って動作が完結するといった現象）を指す。再帰行為表現の研究では、両言語に共通して、最も中心的な「再帰行為」は着脱行為とその周辺であることが明らかになっている（表中、点線で囲んだ部分）。（重盛 1992:64）

表1：日本語とスロヴェニア語の再帰行為表現の形態・統語構造（重盛 1992：65、一部加筆改良）

日本語	スロヴェニア語
再帰代名詞句＋他動詞 自分（の顔）を見る	形態素 <i>se</i> による再帰性 <i>gledati se</i>  <i>kopati se</i>
場所格＋自動詞 風呂に入る	
再帰動詞 服（コート）を着る 靴（サンダル）を脱ぐ	形態素 <i>si</i> による再帰性 <i>obleči se/~si plašč</i> <i>sezuti se/~si sandale</i>
他動詞の再帰用法 体（顔）を洗う 髪を切る 足を折る ブローチを付ける	<i>umiti se/~si obraz,</i> <i>postriči se/~si lase</i>  <i>zlomiti si nogo</i> <i>pripeti si zaponko</i>
手を叩く	自動詞 <i>ploskati</i>

再帰行為を表現する構文は、日本語には、再帰代名詞句と組み合わせて使われる他動詞、場所格と組み合わせて使われる自動詞、再帰動詞、そして他動詞の再帰用法の四つがある。このうち、再帰動詞と言えるものは日本語には9つある（浴びる、着る、履く、脱ぐ、かぶる、羽織る、背負う、担ぐ〔口に〕くわえる）。また、他動詞の再帰用法は、一定の規則のもとに、さまざまな他動詞を使って再帰行為を表す。この規則が、第2節で言及したガ格名詞とヲ格名詞の所有関係で、表1にも“体”“髪”“手”などの身体部位や“ブローチ”などの所有物の両方が見られる。

一方、スロヴェニア語においては、日本語の場合と同じような意味での「再帰動詞」という項目をたてる意義はないが、多くの印欧語に見られるような再帰辞があり、その対格形（形態素 *se*）と与格形（形態素 *si*）の使い分けによって、再帰行為表現の統語的類別ができる。意味的に最も中心的な再帰行為や、身体部位を目標とする行為は再帰辞の対格形 *se* と与格形 *si* のどちらも許すものが多く、表1でも二つの構文の使用範囲が重なる部分となって示されている。また、数は多くないが、自動詞一語が再帰的行為の意味も受け持っているものも見られる。（例：*ploskati* 手を叩く）

今回注目している介在性状況の表現は、表の中心からは少し外れて下のほうの部分の、日本語では「他動詞の再帰用法」にあたる構文の多くと、再帰行為表現の対照では問題にされなかった他動詞構文にも見られる。また、再帰行為表現の対照（重盛1992）と本稿では、「再帰」の定義にずれが

あることも分かる。再帰行為表現の対照（重盛1992）では「再帰性」の意味を仁田（1982）の定義でくくったのに対し、本稿の介在性状況表現に含まれる「再帰構文」は、鈴木（2007:218）が提示する2条件（直接受身が成立せず、ガ格名詞とヲ格名詞が「N1のN2」で表せる）でくくっている。B-1の分離可能な所有関係は、働きかけが動作主体に戻ってくることを条件としない単なる所有関係も含むので、再帰行為表現の対照（重盛1992）には含まれていなかったものも含むことになる。例えば、「ブローチをつける」の場合は、動作が自身の胸などに戻ってくるが、「家を建てる」の場合、家は自分から遠く離れたところに建てることもできる。

また、表1に見られる「足を折る」という表現や、B-1の分離可能な所有関係に分類できる表現として「（戦争で）息子を亡くす」「（火事で）家を焼く」「（風で）帽子を飛ばす」などは、構文的にはヲ格名詞（その意味は身体部位または所有物）と他動詞の組み合わせなので再帰構文ではあるが、ガ格に立つ者の意志には反して、望んでいない事態が実現してしまう、いわゆる“迷惑”な事態を表している。つまり、佐藤（2005）の言う主体による事態のコントロールという条件を欠いているわけである。実際に変化をもたらす行為主体や変化の原因が言及されていないのではなく、原因がデ格（スキーで、戦争で、火事で、など）で副詞的に表現される傾向のある言い回しである。本稿で見ている介在性状況の最も大きな特徴は、主体がほかの誰かに依頼する行為でありながら、介在者に言い及ばないという、つまり使役主体（ガ格名詞）の意図に即した行為を促すことなから、これらの迷惑表現は、研究対象から外するのが妥当である。迷惑表現に共通の特徴として、「（自分の）足をXに折らせる」「折ってもらう」「家を焼かせる」「焼いてもらう」などと言い換えることはできない。動詞句が使役的（他動詞表現）であるにも関わらず、文が伝える意味は受身的であるところに、使役と受身の連続性が感じられて興味深い。

#### 4. 介在的状況表現の特徴と使用実態

さて、もう一度第2節で示した介在的状況表現の統語的分類に戻り、それぞれの統語構造で表される介在的状況表現の特徴と使用実態を見る。まず、再帰行為表現とは共通点のない他動詞文（分類のA）、そのあとに再帰構文（分類のB-1とB-2）を見る。

使用実態に関しては、SketchEngineのコーパスを利用した。主に、それぞれの構文の例にすでに見られる動詞のWord Sketchを使った。Word Sketchでは、動詞と共起する名詞句を頻度順に見たり、特定の動詞と名詞の組み合わせが実際の文でどのように、またどのぐらいの頻度で使われているか、そして、その意味の確認のためにそれぞれの文の前後の文脈を確かめることができる。しかし、介在性状況は、そもそも行為主体に言及しない、また動詞マーカーも表層に現れない表現であるため、コーパスを使つての調査には限界がある。

##### A. 非再帰的他動詞文

これは、鈴木（2007）の言う「使役的他動詞文」である。二つの先行文献のどちらの例にも同じ他動詞「殺す」が使われている。

##### 殺す/ubiti

(12) ヒトラーが何百人ものユダヤ人を殺した。（鄭 2006: 117-118、(5)再掲）

(13) マフィアのボスが警備員を殺した。（佐藤 1994:61、(11)再掲）

スロヴェニア語のコーパスでは、日本語に対応するスロヴェニア語の動詞 ubiti “殺す”の現れる文の中に上の日本語例文(12)とよく似た介在性状況表現が見つかった。

(14) Adolf Hitler je ubil premalo Judov.  
“Adolf Hitler” COP “kill” [past] “too little” “Jew” [pl] (Adolf Hitler killed too little Jews.)  
(ヒトラーが殺したユダヤ人は少なすぎた。)

(2009.8.16., <http://www.rtv slo.si/svet/idi-amin-dada-zadnji-skotski-kralj-iz-ugande/210022>)

しかし、コーパス全体の中では、このような介在性状況表現はごくわずかである。「殺す/ubiti」を Word Sketch で見ると、特にウェブや新聞報道などでは、家族間の殺し、または戦争やテロでの殺しの文脈が多い。行為主（主語）が無生物のものも多く、何が原因となって、または誰が、何人の人を殺したかというようなデータに焦点を当てたもの、または同じような内容を受身で述べた文が多く、したがって介在性表現はほとんど見当たらない。鈴木（2007）は、この非再帰的（使役的）他動詞文の介在性状況表現の成立要因を次の3つとしている。

- a. 結果性が必要である（動詞の意味的焦点が動作過程にないこと）
- b. 再帰性がないこと
- c. 主語が権力を持っていること

このうち、社会的・歴史的な文脈における条件と考えられる c. がその言語社会で有効かどうか、という要因が特に重要だと思われる。

### 建てる/graditi, postaviti

(15) 聖徳太子が法隆寺を建てた。（鈴木2007:218、(6)再掲）

「建てる」は、B-1 の統語構造にも現れるが、例文(15)では、ヲ格名詞（法隆寺）がガ格名詞（聖徳太子）の所有物ではないと思われるので、この動詞は A の非再帰的他動詞文にも使われるものと考えられる。この場合には、それぞれの言語社会でガ格の行為主体が、ときにはヲ格の行為客体も合わせて、その言語社会で歴史上よく知られているのであれば、介在性表現として解釈できる。スロヴェニア語の graditi の場合は歴史的人物の名前のほかに、機関としての「教会 cerkev」や聖職者の名前などが頻繁にガ格共起する。この条件（ガ格名詞が歴史的人物、または教会など）が満たされれば、両言語において介在性表現は比較的多い。「建てる」の対応語としてスロヴェニア語では postaviti（たてる、打ち立てる “to erect, put up”）もある。この場合は抽象的表現も多いが、具体的に「記念碑を spomenik」「チャペルを kapelico」などの現れる文では、3人称複数主語を含め、介在性の意味にとれる文のほうが非介在性状況文より多い。また、再帰性の有無を調べる方法のひとつとして、鈴木（2007）がガ格名詞とヲ格名詞の所有関係を挙げたが、「\*マフィアのボスの警備員」「\*ヒトラーのユダヤ人」が非文になるのに対して、「聖徳太子の法隆寺」はどうだろうか。さらに面白いと思われるのは、スロヴェニア語でも、\*Hitlerjevi Judi（ヒトラーのユダヤ人）という言い換えは無理だと思われるが、Plečnikova cerkev（プレチニクの教会、プレチニクは建築家の名前）という言い方はよく使われるのである。建造物とその発案者、または建造の命令を下した者との関係は、所有物と所有者の関係に準じるものと考えられるべきだろうか？

### B-1. 分離可能所有関係の再帰構文

Xガ + [所有物]ヲ + [動詞]（実際にはXの所有物をYが[動詞]）

### 家を建てる/graditi (si) hišo

(16) 太郎が家を建てた。（(2)再掲）

両言語とも、コーパスでこの動詞と最も組み合わせの多いヲ格名詞は「家 hiša」であり、その多くが介在性表現である。スロヴェニア語では対格名詞なしで動詞 graditi を自動詞的に使うこともあり、この場合も介在性解釈ができる。また、与格再帰辞 si（＝“自分のために”）の使用は任意だが、頻度は高く、介在性解釈の文脈にも使われている。

### 服を作る/narediti (si) obleko

(17) 花子がセーターをつくった。（佐藤2005:97、(8)再掲）

「作ってもらう」「作ってくれる」のように、授受動詞との組み合わせでは介在性の解釈がなくなると考えがちだが、「母が郷里の仕立て屋でスーツを作ってくれた」「銀座でオーダーメイドのスーツを作ってもらう約束」など、実際に作る人は文に現れていないケースもある。コーパスでこのような文を見ていると、「仕立て屋」「オーダーメイド」など、特定の文脈に共起する副詞的語彙が、介在的状況の理解を手伝っていることが分かる。

#### B-2. 分離不可能所有関係の再帰構文

Xガ + [身体部位]ヲ + [動詞] (実際にはXの身体部位をYが[動詞])
---

#### 切る/striči (不完了)、postriči (完了)

(18) 花子が髪を切った。(3)再掲

「切る」の Word Sketch では、身体部位として、首、爪、腹、手首なども見られる。しかし、この中で介在的状況と解釈できる文を形成するのは「髪(の毛)」だけである。「首を切る」の場合は、他者の首を切る(慣用句、または、首を切つて殺す、首を切られて、、など)というのが普通の解釈であり、反対に、「腹を切る」、「手首を切る」、「爪を切る」の場合、「自分の」は強調を表わすだけで、特別な文脈をのぞき自分自身の身体部位を切ると解釈するのが普通で、はじめの2つは自殺の意、後者は、自分で切るのがもっとも当たり前の身体部位である。このように、[身体部位]ヲ + 「切る」の場合は、ヲ格の名詞によって、介在的状況の表現が普通かどうかが決まることがわかる。

スロヴェニア語の場合は、日本語の「切る」に対応すると思われる動詞 *striči/postriči* が、畜産業の分野の「羊の毛を刈る」などの意味にも使われるため、共起するヲ格名詞の頻度順が違って来るが、身体部分としてはやはり「髪 *las(je)*」は「爪 *noht*」とともによく共起する。「髪」の場合は介在的状況と理解できる文が多いが、「爪」はそうではない。やはり日本語の場合と同じように、ヲ格名詞の種類によって介在的状況の解釈ができるかどうかが決まるのだと言える。その身体部分によって、社会的にも、自分が切るのが普通か、人に切ってもらうのがより普通かが違うのである。

#### 4. おわりに

日本語もスロヴェニア語も、系統的なつながりはなくても共に対格言語である。介在的状況の表現をこの2言語間で調べようと考えついたとき、形態・統語的な違いよりも、社会・文化背景の違いのほうが多く出てくるのではないか、という漠然とした予感があった。

本稿で触れた例だけで介在的状況表現の対照が十分できたとは言いがたい。形態・統語構造による分類ですっきりと整理できたと言うよりは、「再帰性」とは何か、「所有関係」とは何か、など、初めは気がつかなかった問題を考え直すきっかけを持ったに過ぎないようである。個々の動詞をコーパスを通して検討し直す段階では、確かに文化背景の違いをそこここで感じた。動詞でも名詞でも、一語一語の意味の守備範囲が、そして動詞と名詞の組み合わせの可能性も、それぞれの言語の歴史に由来していることを見た。介在的状況表現は、頻繁に見つかる表現ではないが、これからもさらに両言語における使用の型や頻度に注意を向けて整理して行きたいと思う。

## 参考文献

- 稲村すみ代 (1995) 「再帰構文について」『日本語学科年報 16』東京外国語大学 55-80.
- 鄭聖汝 Chung Sung-Yeo (2006) 『韓日使役構文の機能的類型論研究—動詞基盤の文法から名詞基盤の文法へ—』くろしお出版
- 佐藤琢三 (1994) 「他動詞表現と介在性」『日本語教育』84号 53-64.
- 佐藤琢三 (2005) 「介在性の他動詞文」『自動詞文と他動詞文の意味論』第4章、笠間書院、88-97.
- 澤田淳 (2007) 「日英語の他動詞構文の事象構造に関する対照言語学的考察—“直接使役 direct causation”か“間接使役 indirect causation”か—」『日本言語学会第134回大会予稿集』日本言語学会、428-433.
- 重盛千香子 (1992) 「日本語とスロヴェニア語における再帰行為表現の対照」『第5回日本語教育連絡会議総合報告書』第5回日本語教育連絡会議事務局、ウッジ/新潟、56-67.
- 重盛千香子 (2008) 「対照研究で見えてくる日本語の使役表現—日本語とスロベニア語」21世紀における北東アジアの日本研究国際シンポジウム論文集、北京日本学研究中心 Beijing Center for Japanese Studies, Beijing, China.
- 鈴木容子 (2003) 「「美容院で髪を切る」のような言い方が成立する条件」『日本語文法学会第4回大会発表論文集』43-51.
- 鈴木容子 (2007) 「使役的他動詞文の成立条件—語用論的な条件の健闘を中心に—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第56号』217-225.
- 仁田義雄 (1982) 「再帰動詞、再帰用法—Lexico-Syntaxの姿勢から—」『日本語教育』47.
- 早津恵美子 (2004) 「使役表現」『朝倉日本語講座 6 文法 II』尾上圭介編 128-150 朝倉書店
- 山本幸一 (2008) 「メトニミーの認知言語学的研究—比自立型メトニミーを中心に—」名古屋大学博士論文、第9章 <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/achievement/pdf/doctor/48.pdf>
- Comrie, Bernard (1985) Causative verb formation and other verb-deriving morphology, *Language Typology and Syntactic Description Vol III: Grammatical categories and the lexicon*, ed. Timothy Shopen, Cambridge Univ. Press, 309-348.
- Dixon, R.M.W. (2000) A typology of causatives: form, syntax and meaning. *Changing valency: case studies in transitivity*. eds. R.M.W. Dixon & A.Y. Aikhenvald, Cambridge Univ. Press, 30-83.
- Gilquin, Gaëtanelle (2006) The place of prototypicality in corpus linguistics: Causation in the hot seat. *Corpora in Cognitive Linguistics: Corpus-Based Approaches to Syntax and Lexis*. eds. Stefan Th. Gries & Anatol Stefanowitsch. Mouton de Gruyter, Berlin/New York, 159-192.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. II. Descriptive Application*. Stanford, CA: Stanford Univ. Press.
- Shigemori Bučar, Chikako (1992) Izražanje povratnega dejanja v japonščini in slovenščini (日本語とスロヴェニア語における再帰行為表現) *Slavistična revija letnik 40, št. 2*, 143-157.
- Talmy, Leonard (1996) The Windowing of Attention in Language, *Grammatical Constructions Their Form and Meaning*, Ch. 10. eds. Masayoshi Shibatani & Sandra A. Thompson, Clarendon Press, Oxford, 235-287.

## コーパス

- SketchEngine - JapWaC (ウェブコーパス) 409,384,405 tokens
- SketchEngine - FidaPlusd 620m (参照コーパス: インターネット1.24%、本8.74%、新聞65.26%、雑誌23.26%、その他1.50%) 738,503,185 tokens